

おきくと弟

小川未明

青空文庫

空が曇っていました。

「正ちゃんが、学校へゆくときに、お母さんは、ガラス戸から、外をながめて、今日は、降りそうだから雨マントを持っておいで。」と、注意なさいました。

「じやまでしかたないんだよ。もしか、降ったら、一、二つと駈けだしてくるから。」と、答えて正ちゃんは、すなおにお母さんのいうことをききませんでした。

どこか、曇った空にも明るいとこがあつて、すぐに降りそうに思われません。お母さんは、新聞の天気予報には、どうなっているかとそれを見ようとなさっている間に、もう正ちゃんは、家を飛び出して、門を曲がつてしまった時分であります。

「やはり、くもり後雨とある。なぜこう、いうことを聞かない人でしょう……。」と、お母さんは、ひとり言をされました。

まだ、正午にもならぬうちから、はたして雨は降り出しました。はじめは細かで、目にはいらぬくらいでしたが、だんだん本降りになつてきました。いくら元気な正ちゃんでも駈け出してくるわけにはいかないのです。

「おとなしく、雨マントを持っていつてくれればいいものを……。」

お母さんは、子供の身の上を心配なさいました。そして、もう学校の退ける時分に、女中に向かつて、

「きくや、ご苦労でも学校までマントを持っていつておくれ。そして帰りに、どこか、げた屋へ寄つて、あの鼻緒の切れたあしだの鼻緒をたてかえてきてくれない。」といわれ
ました。

晩の仕度をしかけていた十八ばかりになる女中は、奥さまのいいつけに従つて、さつそく汚れた前かけをはずして、出かける用意にとりかかりました。まだ、この家に奉公して、三月とたたないのです、坊ちゃんの学校をよく知らないのです。それで、奥さまから道を聞いて、雨の降る中をげたをさげ、マントを抱えて出かけてゆきました。

もう、そろそろ授業が終わつて、退けかかるので、おきくは、坊ちゃんが出てくるのを学校の入り口で立つて待つていました。風の吹くたびに冷たい雨のしぶきが、彼女のほおにかかりました。天気の良い日は、あたりが暗く、日がいつそう短いように思われたのです。小鳥がぬれながら、あちらの木の枝にとまりました。

「いまごろ弟は、どうしたろう……。」「と、おきくは、故郷の小さな弟のことを思い出しました。

こちらへくるまでは、雨が降ったときは、やはりこうして弟を迎えにいったのでした。自分がこちらへきてしまつてから、もはや降つても、だれも迎えにいつてやるものはありません。母親は、まだ幼い弟の守りをしながら、内職に忙しいからです。そして、北国は、いま冬の最中でした。こちらは、梅の花が咲きかけているが、そして雪ひとつないが、北国は、明けても暮れても、雪が降つているのであります。

「ほんとうに、弟は、どうしているだろう？ もう、学校から、家へ帰つた時分かしたらん。」

こんなことをぼんやりと考えているとき、坊ちゃんが、彼女を見つけて、

「ねえや、マントを持つてきてくれたの、ありがとう。」といつて、元氣よく受け取つて被ると、お友だちといつしよに話しながら、さつきとおきくを後に残していつてしまいました。彼女は、その活発な子供らしい姿を見送つて、ほほえんだのであります。

その夜のこと、明るいランプの下で、家の人たちは、楽しく語り合つたときに、正ちゃんはおきくに向かつて、

「ねえや、おまえには弟があるの？」と、ききました。すると、彼女は、赤いほおに、笑いを浮かべて、

「今年九つになる弟があります。このごろは、雪の中を毎日、学校へいつていますでしょう。」と、答えました。

村から、学校へゆくには、原を越さなければならぬ。そこは、いつも風の強いところだ。あの小さいのに、どうして、そこを通過することだろうと思うと、彼女の心は、暗くなりました。

「そんなに雪が降るの？」と、正ちゃんは、目をまるくしたのです。

「たくさん降ります。三尺も四尺ももつと降ることがあります。」と、おきくは答えた。

「たいへんだね。」

「たいへんでございます。」

「どんな雑誌をとっているの……。」と、正ちゃんは、雑誌を見ながらききました。

「弟ですか？ 雑誌なんかとっていません。貧乏で、とってやることができないのですもの。」

これをきくと、正ちゃんは、だまっていたましたが、本箱の中から、幾冊かの雑誌を取り出してきて、おきくの前に置いて、

「僕の読んだ、古いのだけど送っておやりよ、ね。」と、しんせつにいいました。

「ああ、それはいいことだよ。」と、正ちゃんのお母さんもそばからいわれました。

「どんなにか、喜ぶことでしよう。」と、おきくはいつて、いくたびも頭を下げたのです。みんながやすんでから、彼女は自分のへやにはいつて、ふるさとへ出す手紙をしたためました。それには、

「いまいる家の坊ちゃんは、やさしくて、おりこうで……。。」と書いて、弟にいつてやろうとしましたが、彼女は、ふと筆を止めて、考えました。そして、それを破りました。小さな弟が、風と雪と戦つて、やつと家に帰ると、すぐに末の弟の世話をさせられることを思うと、もう、なにもいうことができなかつたからです。

「私がいなくなつてから、弟が、お母さんの手助けをするのだもの……。。」
 彼女は、目に涙を浮かべました。そして坊ちゃんから、おまえにくだされたのだと簡単に書いて、それから、体を大事にするようにいつてやりました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 8」講談社

1977（昭和52）年6月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「青空の下の原っぱ」六文館

1932（昭和7）年3月

初出：「国民新聞」

1931（昭和6）年2月1日

※表題は底本では、「おきくと弟《おとうと》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：津村田悟

2018年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おきくと弟

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>